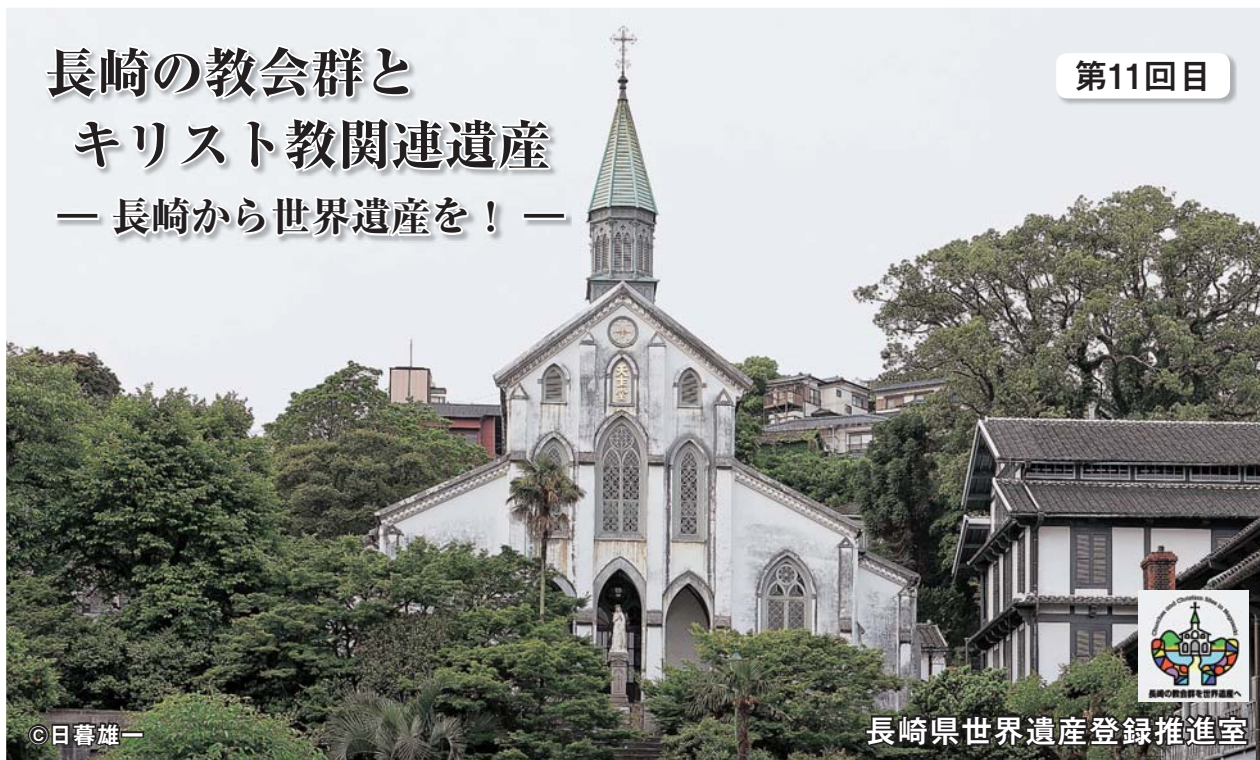


長崎の教会群と キリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第11回目



©日暮雄一

長崎県世界遺産登録推進室

■はじめに

これまで10回に渡り、世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産としての価値や歴史をご紹介してきました。今号からは、構成資産の見所や魅力をご紹介します。

今号では、長崎エリアの「大浦天主堂」を取り上げます。大浦天主堂は、現存する日本最古の教会堂として国宝に指定されており、国宝の洋風建築は、現在のところ大浦天主堂と旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の2つだけで、国内でも非常に貴重な文化財です。

■大浦天主堂の立地について

長崎の南山手にある外国人居留地の北斜面の地に、大浦天主堂は建てられました。居留地の良い土地は既に商人たちに占有されていたため、フューレ神父は岩の多い北向きの急斜面であった南山手乙1番地を3段の平地に造成し、建設用地としました。天主堂の正面は北向きとなり、奇しくも大浦天主堂が捧げられた二十六聖人の殉教地の方角を指していますが、創建当時は殉教地が未確定だったことから、偶然であったと考えられています。

■大浦天主堂で起こった歴史的出来事を表すもの

◇「天主堂」の文字

天主堂正面上部の「天主堂」の文字は、創建当時は「カトリック」という言葉がなかったため、

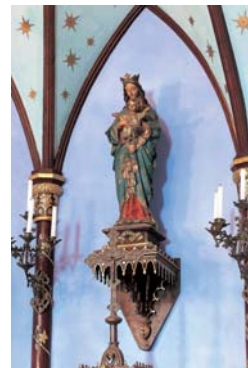
中国でキリスト教を表す「天主教」を用いたものと思われます。

◇信徒発見のマリア像

右脇祭壇に安置された聖母マリア像は、世界宗教史上の奇跡といわれる「信徒発見」がなされたときの遺品で貴重なものです。

◇日本之聖母像

天主堂正面入口に設置された「日本之聖母」像は、信徒発見を記念して1865年にフランスから贈られたものです。当初はプチジャン神父により門前に設置され、増改築の際に正面玄関に移設されました。



信徒発見のマリア像
©日暮雄一



日本之聖母像

◇司教座

主祭壇手前の左側に司教座が設置されています。信徒発見の翌年に、プチジャン神父は日本駐在教皇代理に任ぜられ、司教の叙階を受けたことから、大浦天主堂は司教座聖堂となりました。司教座聖堂とは、教区の最も重要な教会のことで、カテドラルとも言います。現在は、浦上天主堂が司教座聖堂となっています。



司教座



プチジャン神父墓銘板
(※)

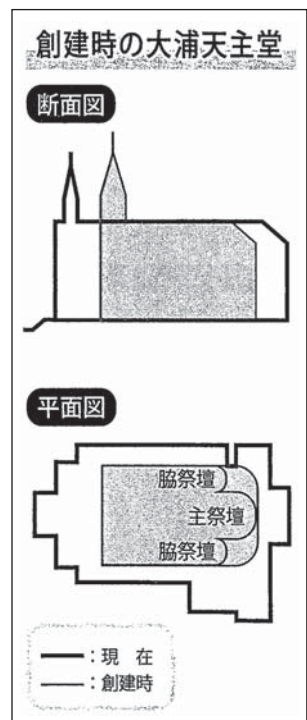
◇プチジャン神父の墓、墓銘板

主祭壇手前の右側に、ラテン語と日本語で碑文を刻んだプチジャン神父の石製墓銘板があります。その床下にはプチジャン神父の墓があります。

※は『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』構成資産候補建造物報告書から転載

■大規模な増改築について

1865年に大浦天主堂は献堂されますが、その後の信徒発見を経て増加した信徒数にあわせて、大規模な増改築が行われました。パリ外国宣教会の1879年報告書には、「長崎の聖堂は非常にせまくなって来たので、四方八方に拡張して二倍にした」との記述があります。長崎総合科学大学の林一馬教授の最近の調査では、創建時の大きさは現在の3分の2程度で、「信徒発見」の場となった脇祭壇が当時のまま残っていることがわかりました（右図参照：平成25年7月28日付け長崎新聞朝刊14面より転載）。



■大浦天主堂の建築物としての魅力（和洋折衷の建築技術）

◇純日本的な切妻屋根

日本家屋に普通に見られる本を伏せたような形で瓦が葺かれています。

◇白い漆喰塗りの外壁

外周の壁はすべて煉瓦造ですが、表面に煉瓦が露出する部分はなく、すべて漆喰塗りで仕上げられています。教会堂において、煉瓦積みの表面を見せるようになるのは明治中期以降であり、それ以前の特徴として注目されます。なお、創建当時は日本の在来工法である海鼠壁^{なまこ}が用いられていました。

◇リブ・ヴォールト天井

教会堂建設の初期の特徴である8分割となっています。西洋では石を積み上げて作りますが、ここでは日本の技術を生かして竹のしなりを用いて天井の曲面を作りだしています。

◇木彫装飾

堂内の随所に見られる木彫装飾は、いずれも技巧的に優れ、極めて完成度の高いものです。寺社建築の彫刻で培われた大工技術の高さが窺えます。